

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 88 号

平成 21 年 8 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第一部」

(草間平作・大和邦太郎訳・岩波クラシックス) より (3)

5 月 8 日

そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。7 たびまでですか」。イエスは彼に言われた、「私は 7 たびまでとは言わない。7 たびを 70 倍するまでにしなさい。それだから、天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、1 万タラントの負債のあるものが、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。(マタイ 18・21 - 25)

神の恩寵によって、深く心にしみとおる喜びを経験したならば、われわれはすぐさまわれわれの敵や、われわれに不正を加えた人を(こういう人は必ずいるものだ)ゆるしてやらねばならない。こうして初めてその喜びを持つことが、神の眼にも真に正当なもので、ゆるぎのないものとなる。

5月11日

主は彼の前を過ぎて宣べられた。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神。」(出エジプト記 34・6)

地震の後に火があったが、火の中にも主はおられなかった。火の後に静かな細い声が聞えた。(列王記上 19.12)

すでにローマの哲学者ポエティウスは彼の有名な論文『哲学の慰め』(562年)のなかで、人間は神の生命にあずかることによるのみ真に幸福になりうる、と論じている。それ以来ほぼ1500年を経たが、だれにとっても、この事情は全く変わりが無い。

その点で、特にありがたいことは、神は人間のように、欺かれなれないということである。だから、ただ形式的に神に近づいただけで暗い心に陽の光を呼び入れることはできない。なおまた、宗教的熱狂や興奮によってもこの目的を達することはできない。神のそば近くにあることは、それらとはまるで別なことで、むしろ全く独特な、静かで、平和に満ちた感情である。

しかもこの感情、すなわち神の近くにあるという喜びは、あらゆる人間的感情のうちでとりわけ強烈なものである。つまりこの感情は、それが人の心を完全に満足せしめるばかりでなく、またあらゆる制限から精神を開放し昂揚する効果の点で、友情や恋愛やその他の感情とはとうてい比べものにならないほど強いのである。…

このような強い力を持つ感情は必ずや実在の対象から出てくるにちがいないということは、みずからこの感情を知っている人びとにとってはそれ以上なんらの証明をも要しないものである。彼らとしては、この感情をまだ知らなかった過去の日々を、残念に思うだけである。…

5月14日

宗教上の事柄においては、ただ限りない誠意と真実のみが大切である。したがって、なんら精神のこもらぬあらゆる形式主義、たとえば、うわのそらでの食卓の祈り、気のすすまない教会通い、いやいやながらの家庭礼拝などは、信仰に益するどころか、むしろ有害である。いわゆる信心深い家庭のきわめて多くの子弟の経験が、このことを雄弁に証明している。

5月16日

人との交際において最も気持のよい、最も有効なものは、落ち着いた、いつも変らぬ友愛である。ごく幼い子供でさえ、それどころか、あらゆる動物でさえ、そのような友愛には敏感であって、とくに、相手の親しみがたまさかの気紛れか、ただその場かぎりの動機から出たものか、それとも永続的な性質のものか、それすら見分けることができる。

5月18日

...もしあなたが憂鬱であったり、不安であったり、そのほか不機嫌なときには、すぐ真面目な仕事にとりかかりなさい。もしそれができにくいならば、誰かに（福音書のいわゆる「隣人」に）小さな喜びを贈りなさい。これなら、いつでもできるはずだ。この方が、普通みんながするように、なにか享楽や気晴しでもって、陰気な霊を追い払おうとするよりもはるかに有効である。そんなごまかしをしても、この霊はすぐまた戻ってくるものであるから。

他人の場合でも、仰々しい訓戒や説得を加えるよりも、ちょっとした贈り物でもしてやるほうが、かえって陰気な霊をたやすく追い払うことができる。

5月24日

外見上の一時的成功よりも、ものごとの結末に注目することがより高い人生の知恵である。これについてイギリスの宗教改革のある先駆者が言っている、「私は、最後に真理が勝利を占めるであろうことを確信する。」理想主義とはこのように、ごく卑近な成功を超えてものを見るという意味であるならば、しかも、特にそれが宗教に根底を持ち、さらに適度の良識と結びついているならば、それは必ず最後に勝利をおさめる、唯一の効果的な人生観である。

5月29日

祈りと思索とは決して対立するものではない。それどころか、この二つともが、真理を完全に把握するのに必要なものである。すなわち、思索はみずから真理を探究するために、そして祈りは神の啓示にあずかるために。どちらか一方だけでは、両方そろったときに可能であるほどの完全な働きをなし得ない。…

5月31日

われわれは喜びよりもかえって苦しみを愛し、ついには喜びを恐れることを学ぶような境地にまで達することができる。ここまできれば、人生の最大の困難はすでに終わったのである。

われわれが苦しみをただできるだけ早くとり除こうとしたり、あるいは全く受身に、ストア主義的にできるだけ無感覚な態度で、これを耐え忍ぼうとしたりするのは、いずれにせよ、正しい態度ではない。むしろ苦悩を、種まきの時期として利用しなければならぬ。…

6月1日

神の慎重な、ゆるやかな導きは、みずからそれを体験しないかぎり、だれもが信じがたい、最も不思議な経験の一つである。それはいつも苦痛と不安とを通しておこなわれるものである。人はたえず、自分の所有する一切のものを捧げ、とくにこれだけはほんとうに自分のものといえる自己の意志をも、完全に神にゆだねる覚悟をしなければならない。そうすると突然、新しい段階が開けてくる。この段階に立つと、自分の過去の歩みがはっきりわかり、特に、自分が幸福な道を選んだこと、そして今や一つの新しい自由が、しかも永遠に、増し与えられたことが明白になる。

ラエタリ（4旬節第4の日曜日）
わが心よ、おまえが囚われている
苦悩を脱して、立ちあがれ。
おまえの上に蔽いかぶさっていた
苦しみの時はすでに終わった。

この日、世界中が、
新しく生まれたように美しい。
おまえはこの緑の丘の上で
これまでも多くの重荷をおろした。

枝ごとに小鳥はやすらい、
楽しげに美しい羽根をつくろう。
最後に残っていた黒い鴉からすも
奥地に飛び去って、戻らない。

なお、しばらくの我慢だ、
もはや心を痛めるな。
春の嵐が過ぎたあとには、
こよなく美しい夏の喜びがくるのだ。

夜明けの露は草の葉ごとに
明るい朝日を浴びて輝き、
ユングフラウの白銀の頂は
澄みわたる青空に光を放つ。

6月4日

見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中に入って彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。(黙示録 3.20)

ヨハネの黙示録 3 の 20 には、神の霊が心のとの外に立ってたたきとき、われわれがその戸を開けると記されている。つまり、われわれの願いに応じて神の霊がより善き生活の門を開くのではない、という意味であるが、これは人間の意志の自由についての重大な見解である。しかし、われわれが戸を開けることもしないなら、それだけまたわれわれの責任も大きいといわねばならない。なぜなら、この場合はできないということではなくて、ただ欲しないということがあるだけだからである。つまり、目の前に現存してすぐに手を入れることができる救いを拒絶するということになるからである。

6月8日

すると、王は答えて言うであろう、「あなた方によく言っておく。私の兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、私にしたのである」。(マタイ 25.40)

…神の国に属するある人との偶然の出会いによって、はからずも神の国に入れられたり、さもなければ入れられなかつたりする人が少なくない。現代のイギリスのある女流文筆家は、これについてつぎのように言っている。

「あらゆる出会い、あらゆる別れ、あらゆる挨拶の機会、あらゆる約束の会合、これらはわれわれにとって開かれた機会であり、それをどう利用するかはわれわれの責任である。われわれの子供、召使、友人、知人たち それぞれの人に対して、われわれは毎日、かつ一日じゅう、感化を、つまりこの世の最も良いものか悪いものを分配しているのである。」

6月15日

弱い信仰でも、全く信仰がないよりははるかによろしい。最後の小さな信仰の火種をもすっかり消してしまうことのないようにしなさい。そうすれば、またそれを吹き起こすのは、容易である。だが、初めから新しく火をつけるのは、ずっと困難なものである。

「勇気を失わず、勇敢な人でありなさい。そうすれば、慰めは必要なときにあなたに与えられよう。」 勇気は、あらゆる純人間的な性質のなかで最も有用なものである。普通、勇気はほんの短い期間だけ必要なものであって、そうすれば、事情が前よりよくなる。しかし、たちまち過ぎさってしまう重大な瞬間に勇気を失うならば、そのために一生の努力も水の泡となることがある。

したがって、およそどんなことがあっても勇気をすててはならない。もしあることをやめるのが明らかに神の御心であるなら、そのことからただしばらく手を引いて、とにかく神の力づよい助けを固く信じて待つべきであろう。実に、神の助けはなにものによってもさえぎられることなく、またすべての損失をも償うことができるものである。

6月17日

主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵を あなたの足台にするまで、わたしの右に座せよ」と。主はあなたの力ある杖をシオンから出される。あなたはもろもろの敵の中で治めよ。

(詩篇 110・1.2)

ある人の生涯において、かなり長い期間にわたって、詩篇 110 の待てという要求だけが、絶え間ない導きとして役立つことがしばしばある。しかしそのあとで、突然、それとは反対の次の命令が下される、「さあ、わたしはあなたをエジプトにつかわそう」と。これに対して「主よ、他の人をやって下さい」と、答えることは許されない。この二つの命令によるこんで従い、両方の時を善用することができる者は、最もすみやかに内的進歩を遂げる。…

6月20日

内的生活においては、鉄をきたえる場合となり行きがよく似ている。内的人間も、くりかえし、時おり火の中に入れられ、それから槌で急激に打ってきたえられねばならない。これによって、彼はしだいしだいに神の欲する形をそなえ、神の目的に役立つものとなる。

なお次のことも鉄をきたえるのとよく似ていて、しかも同時に、非常に慰めを与えてくれる。すなわち、このような灼熱のなかでできたえられたものは、いつまでも硬く、しかもよくしなうということである。これに反して、すべて自分だけの計画や努力には、何か堅牢さが備わっていない。

神は神の聖霊を役立てたいと思う人々にだけ、それを授け給うのであって、ただそれを所有して楽しむためには、与えられない。

6月21日

苦しみは人を強めるが、喜びは大体において人を弱くするに過ぎない。勇敢に耐えしのぶ苦難と苦難との間の休みの時が、害のない喜びである。けれども、すべての苦難は、それをやわらげるに必要なだけの喜びを内に秘めていることも事実である。

あなたが、神からあなたを遠ざける喜びよりも、あなたを神へと駆りたてる苦難の方を好むようになるならば、あなたは正しい道にいたのである。…

6月22日

立派に人生を生きぬき、とくに、平凡にただ生活を維持するだけでなく、より偉大な人生の目的を見失わないためには、どうしてもある種の感激が必要である。実際、人生を空しいものにすまいと思うならば、ぜひとも人生をそのような偉大な目的にささげなければならない。けれども、このような感激には、なお健全で冷静な良識の相当量が結びついていなければならない。この両者の混和・協力から、世に役立つような人間の性格がうまれるのである。

6月27日

われわれはプラトン、アリストテレス、使徒パウロ、ダンテ、ゲーテなどの思想をすっかりわがものにするところまで果たして達しうるかどうか、さらにまた、…これらの思想がわれわれの現代の考え方や生活体験よりもすぐれたものかどうか、そういった点に当然の疑いをかけることができる。

これに反して、われわれはキリストの言葉には完全に同意することができ、その言葉の真実さに完全に心をみたされうるということは、疑いもない事実である。ここにこそ、「キリスト教とは何か」という…問いに対する、簡明な答えがあると私は考える。

6月29日

精神的な戦いにおいて、われわれは決して中立にとどまってはならない。しかし、敵に対して好意をよせ、理解を持つことは、ほとんどいつでもなしうることである。

神と密接な個人的関係にあるという確信があれば、間違いなく、他人に対しては思いやりを持ち、しかし彼らの判断に対しては平気になれる。神と完全に友となった人にとっては、それ以後の人生において、もはや幸福な出来事しか起こらない。

7月2日

だからわたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。(コリント 4-16)

だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、私が弱い時にこそ、私は強いからである。(コリント 12.10)

健康は疑いもなく大きな贈り物ではあるが、それをあまり重く見すぎてはいけない。むしろ、それを損なったり失ったりした場合でも、立派にそれに堪えることを学ばねばならない。なぜなら、健康はまだ最高の、なくてはならぬ善ではないからである。

7月8日

真に美しいものに慣れ親しむこと、それも生活の欲求として、または自分の性格上の特質としてそうすることは、若い人を人生に出発させるにあたって持たせてやることのできるこの上ない護身用の武器の一つである。

7月13日

どんなに大きな仕事であっても、それを細かに分けて、いつも手近かなものだけを眼中に置くならば、それは小さな仕事をするのと同じになる。

7月14日

まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。

一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。(マタイ 6・33,34)

われわれは神の命じた舞う道を歩いていけば、日々その勤めと力とがおのずから与えられる。解くにそれを得ようと思煩うことはいらぬ。ただそれを受け入れて実行すればよい。

7月17日

...神経衰弱症の原因は、一部は遺傳的であり、一部は現代世界の環境全体の中にあるが、この時代病に対して、三つの肉体的手段と二つの精神的方法があり、それらが共同して作用しなければならない。まず、睡眠と、新鮮な空気と、肉食を少なくしてアルコールを全然採らないよい栄養。つぎに、固い信仰と、地上における神の国のための仕事がそれである。この他に有効な治療法は存しない。それに、これらの方法は、必要とあれば、家庭でも用うことができる。